

第 17 回
専門日本語教育学会
研究討論会誌



2015 年 3 月 7 日

於：武蔵野大学有明キャンパス 3号館 301

専門日本語教育学会

THE SOCIETY FOR TECHNICAL JAPANESE EDUCATION

第17回 専門日本語教育学会研究討論会誌

目次

1. 新旧カリキュラム介護福祉士国家試験の使用語彙の比較
中川 健司 (横浜国立大学)、角南 北斗 (フリーランス)、齊藤 真美 (カナダアルバータ州教育省)、
布尾 勝一郎 (佐賀大学)、橋本 洋輔 (国際教養大学) 2
2. 看護師国家試験の出題語彙を体系化する試み
—語構成、造語力、および専門知識に基づく出題語彙の分析から—
陳 雪蓮 (大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程) 4
3. 日商簿記検定試験「試算表」と「精算表」分野に出現する漢字語彙
—各漢字語彙の学習優先順位に関する考察—
水崎 泰蔵 (スラナリー工科大学大学院) 6
4. 語彙の多様性と難易度から見た意見文の成否
—中国・韓国の日本語学習者と日本人学生の比較から—
井上 次夫 (奈良工業高等専門学校) 8
5. 中国における日本向けITアウトソーシング企業の中国人技術者に求められる日本語能力
—IT 専門日本語教科書開発のための基礎的調査より—
王 剡劍 (武蔵野大学大学院言語文化研究科修士課程)、山本 富美子 (武蔵野大学) 10
6. 日本語で学ぶ簿記入門
—中国人留学生にCLILで簿記を教える試み—
岩瀬 ありさ (大原日本語学院) 12
7. EPA 介護福祉士候補者に対するシラバス作成
—「どこから、なにを、どのように」の視点から捉えた成果と課題—
神村 初美 (首都大学東京)、三橋 麻子 (首都大学東京) 14
8. 日本語による専門技術習得の成功・不成功例の分析
—ベトナム人中堅技術者への原子力技術移転を例に—
外崎 淑子 (東海大学)、元田 静 (東海大学) 16
9. 医療専攻留学生の専門領域学習観に関するPAC分析を用いた事例研究
石鍋 浩 (国際医療福祉大学)、松田 勇一 (宇都宮共和大学)、安 龍洙 (茨城大学) 18
10. 外国人学習者の古語・文語学習における困難点
—研究の過程で古語・文語文献を扱う留学生・研究者へのインタビュー調査から—
山口 真紀 (東京工業大学社会理工学研究科博士後期課程)、武井 直紀 (東京工業大学) 20
11. 専門基礎日本語を学ぶ学習者の「構造化能力」の構築
—研究留学生による専門紹介プレゼンテーション活動の観察を通して—
福良 直子 (大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程) 22

新旧カリキュラム介護福祉士国家試験の 使用語彙の比較

Comparison between the Terms Used in State Examination for Certified Care Workers
Based on New and Old Curriculum

○中川 健司^{※1} 角南 北斗^{※2} 齊藤 真美^{※3} 布尾 勝一郎^{※4} 橋本 洋輔^{※5}
NAKAGAWA, Kenji SUNAMI, Hokuto SAITO, Mami NUNOO, Katsuichiro HASHIMOTO, Yosuke

キーワード：介護福祉士国家試験科目、専門用語、新旧カリキュラム
Keywords: State Examinations for Certified Care Workers, technical terms, new and old curriculum

1. はじめに（背景および目的）

EPA(経済連携協定)に基づく介護福祉士候補者(以下、候補者)は、介護福祉士国家試験(以下、国家試験)合格を求められている。候補者がEPAの枠組みで最初に受験した2011年度の第24回試験は、新カリキュラム準拠の国家試験(以下、新カリ)の第一回でもあった。新カリの試験範囲は旧カリキュラムの試験(以下、旧カリ)とは異なる部分もあるため、受験者も前年度までとは違う対応を求められた。

国家試験に合格するには、介護分野の専門知識が不可欠であり、そのためには、介護専門用語を習得する必要がある。しかし、先行研究や既存の語彙教材は専ら旧カリのデータに基づくものであり、新カリに対応できるかどうかは不明である。

2. 国家試験の新旧カリキュラムについて

国家試験カリキュラム見直しにおいては、近年の高齢者や障害者等に対する介護ニーズの変化、多様化、高度化などの社会的状況の変化が重点的に内容に反映されている¹⁾。具体的には、以下の(1)～(5)のような変化が見られる^{注1}。

(1)両者で試験全体でカバーする内容に大きな差はないが、新カリでは、旧カリ科目の枠組みを新たな切り口で科目・科目群として再統合した。

(2)認知症に対する理解がより求められている。

(3)事例問題が重視されている。

(4)介護過程(ケース研究)科目が重視されている。

(5)医療的ケアの内容が加わった。

(1)により、試験で用いられる語彙全体としては大きな変化はないが、上記(2)(3)(4)(5)により出題に反映される語彙に変化が出ると考えられる。

3. 方法

本研究では、国家試験受験に向けた語彙学習の効率化のため、旧カリ(第21-23回)と新カリ(第24-26回)で用いられた語の使用状況を比較対照し、新カリに対応するために候補者はどのような語を学ばなければならないかを検証した。旧カリ準拠の試験は第14-23回の10回実施されたが、ここでは新カリでの語の用いられ方と比較するため、旧カリ最後の3回分の試験のデータを調査した。語の抽出は、(1)試験問題を形態素解析ソフト「茶まめ」と形態素解析辞書「Uni.Doc Ver. 1.38」により解析し、出力結果中の、①名詞及び②隣接する名詞を統合したものを抽出、(2)試験問題を専門用語(キーワード)自動抽出サービス「言選 Web」にかけ、試験問題中の語を抽出、(3)(1)と(2)の結果を照合し、両者に共通するものをリスト化するという方法を用いた。

4. 結果および考察

4-1 旧日本語能力試験レベル別の割合

第21-26回の試験で、異なり4385、延べ16310の語が用いられたが、これらの4385語を旧日本語能力試験レベル別に見ると、級外76.7%、1級6.4%、

※1 横浜国立大学准教授 ※2 フリーランス

※3 カナダアルバータ州教育省教育アドバイザー

※4 佐賀大学准教授 ※5 国際教養大学助教

2級 11.8%、3級 2.0%、4級 3.1%となっている。級外のものが全体の4分の3以上を占めていることから、一般的な日本語教育ではカバーできないことがわかる。

4-2 試験1回あたりの使用語数

試験1回あたりの平均で、旧カリでは異なり1299語、延べ2746語、新カリでは異なり1207語、延べ2700語が用いられており、使用語数については両者の間に大きな差はない。国家試験において出題範囲に入っている項目が全て毎回の試験で出題されるわけではなく、試験毎に出現する語にはバラつきがある。実際、過去6回で出現した異なり語4385語のうち68.3%にあたる2997語は6回中1回の試験でしか用いられていない。

4-3 新旧カリの使用語の重なり

新カリの3回の試験で出現する語2545語(異なり)の47.6%(1212語)は旧カリでも出現する。出現頻度が高い語では重なりが更に大きくなる。新カリ(第24-26回)では、出現頻度上位86語で延べ語全体の約40%をカバーするが、うち84語は旧カリ(第21-23回)にも出現する。また、新カリにおいて、延べ語全体の約70%をカバーする出現頻度上位573語のうち469語は旧カリにも出現する(表1)。

4-4 新カリのみで出現する語

新カリで新たに加わった内容もあるため、そこで用いられる語は学ぶ必要性が高いと考えられる。本研究では、新カリに特有な語として、旧カリ(第14-23回)の試験には出現しないが、新カリの第24-26回試験の3回全てに出現する語を抽出した。

表1 新カリ出現頻度上位語の旧カリとの重なり

新カリ 出現頻度上位	新カリ延べ語 カバー率	旧カリとの 重なり
10語	20.6%	9語
32語	29.8%	31語
86語	40.1%	84語
194語	51.4%	183語
299語	58.4%	263語
573語	69.6%	469語

その結果、心理症状、短期目標、前頭側頭型認知症、慢性腎不全、BPSDの5語が抽出された。これら5語を、2.の新カリ導入による変化という観点から見ると、「慢性腎不全」以外の4語について、「前頭側頭型認知症」は認知症理解と事例問題重視によるもの、「心理症状」と「BPSD」は認知症理解によるもの、「短期目標」は事例問題重視と介護過程重視によるものと推察できる。認知症関連の語が多いが、これは新カリで「認知症の理解」という科目が独立したことによるものである。これらの内容は旧カリでも出題範囲であったが、内容的に複数の科目にまたがっていたため、出題されることがなかったが、新カリで独立した科目になったことにより、これらの語が使用されるようになったと考えられる^{注1}。

5. おわりに

以上から、国家試験に向けた語彙学習の効率化のためには、(1)一般的な日本語教育では対応できないため、介護に特化した語彙学習が必要であること、(2)4-3で述べたような新カリで出現頻度が高い語を学び、それに加えて、4-4で挙げた5語を学ぶべきであること、の2点を考慮する必要があると言える。

(kaigokanji@gmail.com)

注

注1 介護福祉士養成を担当している山岸周作氏(上田福祉敬愛学院教授)の見解による。なお、「慢性腎不全」に関しては2.の(1)~(5)では説明がつかず、試験委員の変更等その他の要因が強いと考えられるとのことであった。

付記:本発表は、科学研究費補助金(課題番号:24520581)の研究成果の一部である。

参考文献

- 1) 中川健司・中村英三・宮本秀樹:新カリキュラムの介護福祉士国家試験受験に向けた科目別介護用語選定の試み,第14回専門日本語教育学会研究討論会誌, pp. 11-12 (2012)

看護師国家試験の出題語彙を体系化する試み

—語構成、造語力、および専門知識に基づく出題語彙の分析から

An Attempt to Systematize Vocabulary for National Nursing Examination:

Based on an Analysis of Word Formation, Lexical Productivity, and Specialized Knowledge

陳 雪蓮^{*1}

CHEN, Xuelian

キーワード：看護師国家試験、出題語彙、体系化、専門知識

Keywords：National Nursing Examination, Vocabulary, Systematize, Specialized Knowledge

1. はじめに

日本は東南アジア諸国との経済連携協定に基づき、日本で看護師として就業することを目指す看護師候補者（以下「候補者」）を相手国から受入れてきた。しかし、候補者自身ならびに日本政府・日本社会各方面の努力にも関わらず、入国年度別に見ると、協定に定められた期間内に看護師国家試験（以下「国家試験」）に合格できた候補者は、多い年でも2～3割に過ぎない。

候補者が当該試験に合格するためには、国家試験に基づく文法圧縮・語彙集中型の日本語教育が必要であると論じられている（岩田・庵2012）が、国家試験出題語彙を対象とした基礎的研究は少ない。また、語彙学習を支援する際には体系性を用いることが有効であり、もともと体系が明瞭に感じられる語群以外の語彙は、さまざまな観点から体系化を行って提示する必要がある（『新版日本語教育事典』2005 pp. 308-309）。

そこで本研究では、第93～103回（2004～2014年実施分）の国家試験に出題された実質語彙^{註1}を分析し、特に難易度が高いと予測される「急性糸球体腎炎」のような、語が長く語構成も複雑な出題語彙の分析を通して、語構成、造語力、および専門知識に基づく出題語彙の体系化を試みた。語彙調査および体系化する過程で得られた知見は、国家試験出題語彙知識の整理のみならず、専門知識の整理にも役立ち、候補者の試験合格に資することが期待される。

2. 調査方法

語彙調査は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」の長単位と短単位^{註2}を参考にし、下記の2種類の語彙データを収集した上で、比較分析した。

- 1) 長単位に基づいて語彙分析を行い、語彙データを収集する。
- 2) 長単位の語を短単位に基づいて分解した上で、短単位の語および接辞的表現を集計する。

3. 結果および考察

長単位および短単位に基づく2種類の語彙調査結果（下記表1）を比較し、国家試験の出題語彙、特に語長の長い語には以下の3点の特徴が見られた。

- 1) 語末から語頭に向けて修飾成分が増すに伴い、語の意味範囲が狭くなる。例えば、「薬」「障害」「～炎」「～術」のような短単位の語や接辞的表現は、それぞれ100語以上の長単位の語に出現しているが、同じ語末を有する語は語末が限定している意味範囲において、下位分類した語となる傾向が見られた（例：「腎炎」、「糸球体腎炎」、「急性糸球体腎炎」の順で下位語になる）。
- 2) 語の意味範囲や構成要素に基づき、出題語彙を体系化することが可能である（次ページ図1）。また、語彙知識のみならず、専門知識に関連づけて、複数の

表1 第93～103回の看護師国家試験出題語彙数

	異なり語数	延べ語数
長単位に基づく語彙調査結果	12079	66805
短単位に基づく語彙調査結果	7182	87303

^{*1} 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

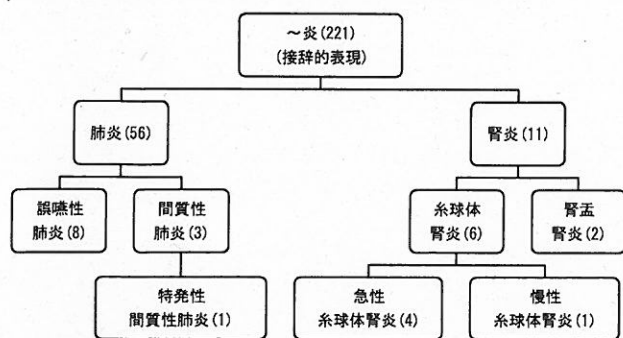


図1 看護師国家試験出題語彙の体系例
(数値は下位語を含んだ出現頻度)

語彙体系を統合した立体的な構造を有する語彙・関連知識体系が作成できる。その中で出題頻度の高い語は、国家試験に出題される重要知識に関連している可能性が高いと推測できる。

2種類の語彙データを比較分析した結果、10語以上の長単位語の語末に出現する短単位語や接辞的表現は7182語中133語あり、また、そのような語末を有する長単位の語は12079語のうち3454語を占めている。図1は、接辞的表現の「～炎」が含まれる、一部の長単位の語を例に示した。「～炎」は、肺や腎などの身体部位、あるいは筋肉や血管などの身体組織を表す語の下に付き、当該部位・組織の「炎症」を意味する病名を形成するため、造語力が非常に大きいと言える。

語の出現頻度から分かるように、国家試験には「肺炎」や「腎炎」のような典型的な病気が繰り返し出題されている。専門知識に基づき、症状や治療処置などに関連する語彙体系を作成したり、異なる語彙体系を統合したりして、より多くの語を専門知識に関連付けながら学習することが重要であると言える。候補者は医療看護の専門知識を有しており、専門的語彙の学習を始める段階から、徐々にこのような語彙整理を意識化すれば、効率的な語彙学習が期待できる。

一方、一度しか出題されていないものの、日本語母語話者にとっても難解であろうと思われる「蜂窩織炎」のような語も多数見られる。これらの出題語を全て学習することは困難であり、効率的ではない。「～炎」(つまり「炎症」という症状の性質から、注意すべき観察項目や講じるべき処置を予測し、国家試験問題に解答するには出題意図を理解することが可能であろうと考えられる。

3) 語彙学習および意味を理解するには、語末か

ら語頭への順で考えると概念が捉えやすく、また、語と語の関連性および分類に注意を払うと理解が深まりやすいと考えられる。

「誤嚥性肺炎」と「間質性肺炎」を例にとれば、両方とも「肺炎」の下位分類であるため、共通の症状や治療処置方法が存在する。しかし、病因が異なるため、必要とする治療・看護においても相違が生じる。語のレベルに止まらず、上位語である「肺炎」を理解した上で、両疾患を区別しながら学習すると、語彙への理解もさらに深まると思われる。

4. おわりに

本研究では、第93～103回の看護師国家試験の出題語彙を調査し、長単位と短単位に基づく2種類の語彙データを比較分析した上で、語構成、造語力、および専門知識に基づく長単位語の出題語彙の体系化を試みた。上述のように、上記3点に留意して教材を作成し、体系的な語彙学習を促すことが有効だと考えられる。今後は、出題語彙調査のみならず、候補者と現場の現状を考慮した上で、構想した教材の具体化とその活用方法を検討していく必要があると考えている。

(chenman1012@msn.com)

注

注1 機能的な意味ではなく、具体的な意味を持つ語彙。ただし、英語略語は除外した。

注2 具体的には、長い単位系列の中のW単位と短い単位系列の中のβ単位を参考にしている。

参考文献

- 1) 岩田一成・庵功雄：看護師国家試験のための日本語教育方法必修問題編，人文・自然研究，第6号，pp.56-71 (2012)
- 2) 日本語教育学会編：新版日本語教育事典，大修館書店 (2005)

参考ウェブサイト

- 1) 経済連携協定(EPA)に基づく外国人看護師候補者の看護師国家試験の結果(過去6年間)
http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10805000-Iseikyoku-Kangoka/0002_2.pdf (2015年2月10日最終閲覧)
- 2) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引き第1.0版
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/doc.html (2015年2月10日最終閲覧)

日商簿記検定試験「試算表」と「精算表」分野に 出現する漢字語彙

—各漢字語彙の学習優先順位に関する考察—

Kanji Idioms which Appear on Trial Balances and Work Sheets of The Official Business Skill Test in Bookkeeping:
A Study of Prioritizing Useful Kanji Idioms

水崎 泰蔵^{*1}
MIZUSAKI, Taizo

キーワード： 簿記検定、漢字語彙、分布

Keywords: The Official Business Skill Test in Bookkeeping, Kanji idioms, distribution pattern

1. はじめに —目的と背景—

本研究は毎回約10万人が受験する日本商工会議所(以下日商)簿記検定試験に出現する「漢字からなる語彙および漢字を含む語彙」(以下漢字語彙)を調査するものである。簿記会計分野を専攻する日本語非母語話者(以下外国人)向けに、簿記日本語の学習ツールを提供することを目的とする。簿記日本語とは、国田(2012)は原則「漢字語彙」であると述べている。

河野(2008)の各大学向け資格・検定講座の調査によると、最も多かった講座は日商簿記検定試験としてゐる。また、千葉他(2013)は、大学で想定している簿記レベルは、日商簿記検定試験3級が21件/60%で最も多いとしている。したがって本研究は、日商簿記検定試験3級(以下簿記検定)を調査対象とした。

2. 調査の手順と方法

調査範囲は簿記検定第132~136回の直近5回(以下過去問)とした。

次に調査対象の出題分野について述べる。簿記検定の出題は、①仕訳、②帳簿記入、③試算表、④伝票会計、⑤精算表の5分野からなる。分野別の漢字語彙数は順に、①425語/23.3%、②175語/9.6%、③569語/31.2%、④173語/9.5%、⑤480語/26.4%

(以上比率は、分野別の漢字語彙数を分子/①~⑤の漢字語彙数1,822語を分母)であった。そのうち、②/④の2分野は、与えられた簿記専門用語を選択

していく形式であるのに対し、①/③/⑤の3分野については、出題文を読み解いたうえで解答を導き出す形式である。また、①~⑤の漢字語彙数1,822語に対して、①/③/⑤が占める漢字語彙数は1,474語/80.9%に達する。①については水崎(2014)が調査済みであるため、①を除いた③試算表と⑤精算表を調査対象とした。

漢字語彙の抽出方法であるが、例えば第135回の「消耗品の棚卸を行ったところ、未使用の残高が¥15,000あった」という出題文から、「消耗品/棚卸/行った/未使用/残高」のように抽出を行っていく。漢字語彙抽出の後、以下の作業はExcelのFind機能を使って集計を行った。

3. 結果および考察

3.1 調査結果の概要および学習優先順位の判定

以下「試算表」と「精算表」の順に数値を示す。過去問で出現する「延べ漢字語彙」は566語/480語であった。それに対し「異なり漢字語彙」は144語/195語にとどまった。「異なり漢字語彙」の内訳は、過去問で「複数回出現」漢字語彙が76語/89語。「1回のみ出現」漢字語彙が68語/106語であることから、特定の漢字語彙が繰り返し出現する傾向が読みとれる。

そこで、繰り返し出現する漢字語彙を特定するため「複数回出現」漢字語彙毎に出現頻度を付した。そのうえで、過去問直近5回の中での分布回数を調べた。すなわち、過去問で「毎回出現した」漢字語彙を「分

^{*1} スラナリー工科大学大学院外国語研究科講師

表1 分布5回漢字表 単位：過去問での出現頻度

試算表	支払い	32	為替手形	18
	振出し	25	約束手形	7
	当座預金口座	23	平成**年	5
精算表	**月	16	行(ぎょう)	5
	**日	13	売買目的有価証券	5
	売掛金	10	差額補充法	5
	次	10	完成	5
	決算日	9	時価	5
	耐用年数	9	減価償却	5
	残存価格	7	売上原価	5
	備品	7	受取手形	5
	定額法	6	処理	5

布5回」と称し、以下「1回の試験の中で頻出」している「分布1回」まで、5段階にグループ化した。

表1によると、「約束手形」は過去問での出現頻度は18回で、分布5回グループに入った。一方「商店」は出現頻度が同じ18回であるが、分布1回グループに入った。分布1回グループで出現頻度が多い漢字語彙よりも、分布5回グループ「約束手形」の方が学習優先順位が高いことがわかった。分布5回グループの漢字語彙で、かつ過去問で出現頻度の高い漢字語彙、例えば「当座預金口座」(23回出現) / 「売掛金」(10回出現)等の漢字語彙が、学習優先順位「最優先」の漢字語彙であると言える。5段階にグループ化した「複数回出現」漢字語彙に、「1回のみ出現」漢字語彙を加えた144語/195語、合計339語を、外国人向け「学習優先順位別 漢字語彙一覧表」(以下漢字表)とした。

漢字表のレベルであるが、JLPT各級で出題される漢字(以下JLPT漢字)と比較した。過去問におけるJLPT漢字数は「試算表」と「精算表」の順に150字/204字であった。級外はゼロであった。JLPT漢字級別の内訳は順に、N5で34字/30字、N4で28字/41字、N3で43字/76字、N2で28字/29字、N1で17字/28字であった(各級とも異なり漢字数)。N5~N3が252字であるのに対して、N2~N1は102字と少ない。初中級レベル日本語学習者でも、N2~N1のJLPT漢字すべてを学習しなくとも、簿記検定に特化した漢字語彙を選び、学習することが可能である。

3.2 簿記専門用語集との違い

簿記専門用語集で、過去問における出現頻度を各漢字語彙に付し、分布回数毎にグループ化した文献は管見の限り見当たらない。例えば「簿記3級の主要勘定科目表」(簿記のきほん研究会)で、第4番目に掲載されている「繰越商品」は、過去問直近5回では出現していない。そして、「資産」分野や「負債」分野等、簿記学の観点から簿記専門用語集を区分しているが、外国人向け学習優先順位を考慮したものではない。

漢字表では、分布5回グループ「支払い」(32回出現)や分布4回グループ「行う」(11回出現)等、簿記日本語分野に限定せず、漢字語彙が掲載されている。簿記検定の出題文を初めて読む外国人にも、「簿記日本語以外で頻出する」漢字語彙を学習する機会を提供している。

4. おわりに - 調査範囲の設定について -

簿記専門家からの聞き取り調査の中で「簿記検定は20年前に比べると、1.5倍程度は難易度が高くなっている」(2014年9月現在)との記録がある。簿記検定の調査や今後の簿記日本語教育について、「速報性」が求められることを示唆している。今回の調査範囲は直近5回分としたが、さらに過去に遡った場合、学術調査に必要な「量」の充実は図れるが、簿記日本語教育に求められる「速報性」とどのように両立していくのか、今後の課題となった。

(taizo03mizusak@sut.ac.th)

参考文献

- 1) 河野志穂：大学における資格・検定取得支援の現状と背景、佐賀大学高等教育開発センター大学年報第4号、43-44(2008)
- 2) 国田清志：専門科目教育にかかわる留学生の日本語教育、人文科学年報第42号、専修大学人文科学研究所、61-74(2012)
- 3) 千葉啓司・李精他：大学における簿記教育の問題点の整理と対策案の提示、日本簿記学会簿記教育研究部会平成24・25年度研究部会、21-22(2013)
- 4) 水崎泰蔵：簿記検定試験に出る漢字の調査、第16回専門日本語教育学会研究討論誌、10-11(2014)
- 5) 簿記3級の主要勘定科目表、簿記のきほん研究会 kenkai.fc2web.com (2014年11月3日閲覧)
- 6) Nouben: Kanji Lists, nouben.com (2014年9月30日閲覧)

語彙の多様性と難易度から見た意見文の成否

— 中国・韓国の日本語学習者と日本人学生の比較から —

Success of Letters to the Editor by Ratio of Lexical Diversity and Level:
Comparison of Learners in China, Korea and Japanese Students

井上 次夫^{*1}
INOUE, Tsugio

キーワード：新聞投書、使用語彙、語彙多様性、語彙レベル

Keywords: letter to the editor, active vocabulary, lexical diversity, lexical level

1. はじめに

意見文の成否に語彙はどの程度、関与しているの
であろうか。本発表では意見文としての投書タスク
の達成率が高い日本語学習者は、どのように語彙を
使用しているか、日本人学生の場合と比較しつつ、
語彙の多様性と難易度に着目して分析を行う。

2. 対象データ

対象データは、YNUコーパス（金澤 2014）に掲
載されている横浜国立大学に在学の日本人学生 30
人、中国と韓国の日本語学習者（留学生）各 30 人が
作成した「市民病院の閉鎖について投書する」タス
クの文章である。同書は、書く言語活動の分類にお
いて、自分から書く「自発型」、読み手が「不特定の
相手」、長さがある程度長くなる「意見文」として新
聞投書を位置付けている。この点で、本投書は意見
文の使用語彙調査に適するデータであると言える。

被験者は作文タスク 12 種の総合評価に基づき上
位・中位・下位に群分類、各 10 人。日本語学習平均
年数、日本語能力試験 1 級・N1 の人数、本投書タス
クの達成率^{※1}を表 1 に示す。日本人学生の分類なし。

表 1 被験者の群分類

	上位	中位	下位
中国	8 年、10 人 達成率 80%	4.5 年、10 人 達成率 40%	3.5 年、6 人 達成率 5%
韓国	6.8 年、8 人、 達成率 90%	4.5 年、9 人 達成率 50%	2.0 年、2 人 達成率 25%

^{※1} 奈良工業高等専門学校一般教科教授

3. 使用語彙の多様性

対象データにおける使用語彙の多様性の判定には
これまで指標として提案されている Guiraud 値（以
下、G 値）を用いた。これは、異なり語数を延べ語
数の平方根で割ったものである^{※2}。

$$G \text{ 値} = \text{Type (異なり語数)} / \sqrt{\text{Token (延べ語数)}}$$

まず、語彙多様性に関して次の仮説を検証した。

【仮説 1】語彙多様性は、中国・韓国の学習者より
も日本人学生のほうが大きい。

【結果】各被験者 30 名が投書で使用した総語数は
異なるため、平均延べ語数、平均異なり語数を用い
て G 値を求めた。表 2 参照。その結果、語彙多様性
は、韓国 6.64 < 日本 6.83 < 中国 7.21 であり、中国
人学習者の語彙多様性が最も大きかった。

次に、日中、日韓、中韓の各組で G 値の平均値に
ついて対応のない t 検定を行った。表 3 参照。その
結果、中国と韓国の学習者間において $t(58) = 2.110$ 、
 $p = 0.039$ 、 $p < 0.05$ で、統計的有意差が認められた。
このため、中国人学習者は韓国人学習者より語彙多
様性が大きいとすることができる。

表 2 語彙多様性 (Guiraud 値)

	延べ語数	異なり語数	G 値
日本	133.4	78.8	6.83
中国	136.4	84.7	7.21
韓国	137.6	78.2	6.64
G 値	上位	中位	下位
中国	7.42	7.08	7.13
韓国	6.98	6.98	5.97

表3 中国と韓国のG値のt検定

	N	平均値	SD	t 値	p 値
中国	30	7.21	1.140	2.110	0.039
韓国	30	6.64	0.928		

4. 使用語彙の難易度

使用語彙の難易度レベル判定には「学習項目解析システム」^{注3}の日本語教育語彙レベル（初級前半・後半、中級前半・後半、上級前半・後半）を用いた。

【仮説2】使用語彙レベルは、中国・韓国の学習者よりも日本人学生のほうが高い。

【結果】上級（前半・後半）レベルの平均使用語数は、韓国4.9<中国5.0<日本8.2であった。t検定の結果、日本と中国： $t(58)=2.770, p<.01$ 、日本と韓国： $t(58)=2.934, p<.01$ となり、日中・日韓の間で統計的有意差が認められ、仮説は支持された。

ここで、日本人学生と中国・韓国の学習者の群別に使用語彙の多様性と難易度の状況を図1に示す。すると、難易度（上級語%）は中韓ともに下位から上位へと高くなる一方、多様性（G値）はほぼ横ばいである。いま、仮説1での中国の語彙多様性の大きさの理由を探ると、表2の異なり語数の多さが注目される。そこで、中国と韓国の群別にA:種類（平均異なり語数）とB:分量（1文平均字数）を調査した。

A: KL60.0<CL79.8<CM82.1<KM86.9<KH87.7<CH92.1

B: KL34.3・KM34.3<CM36.7<CL39.1<CH44.7<KH45.2

日本のA:78.8語、B:39.5字と比較すると、種類は中韓の中・上位が多く、中国下位も多い。分量は中韓の上位が多く、中国下・中位も韓国に比して少ない。以上から、概して中国の学習者は多種類の初・中級語を多用していることが推測される。

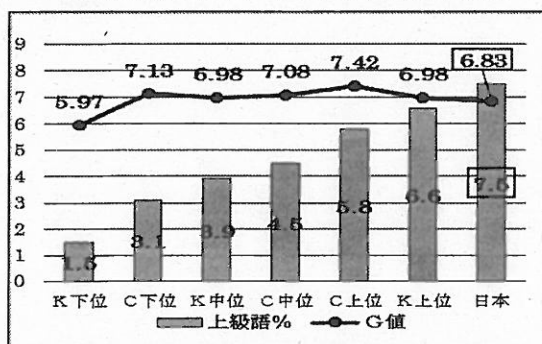


図1 語彙の多様性と難易度（日中韓）

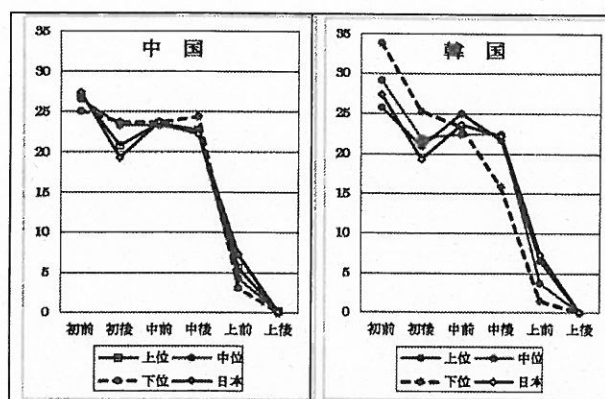


図2 語彙レベル別使用率(中韓群別と日本)

次に、投書における語彙レベル別使用率を図2に示す。まず日本の使用率をみると、「初後(19.3%)」が「中前(23.7%)・中後(22.2%)」よりも低くなっている点が特徴的である。

(日本)：上後<上前<初後<中後<中前<初前

これを標準とした場合、投書タスク達成率の高い中国と韓国の上位がともに日本と近似した語彙レベル別の使用傾向を示している点は注目に値する。

このことから、意見文としての投書の成否には使用語彙の多様性よりも難易度が関与し、使用語彙における難易度レベル別の使用率（構成比）が影響を与えていることが予測される。

5. おわりに

今回、意見文の成否について投書の使用語彙の頻度に着目した分析を行ったが、今後、語彙内容に着目した分析を行い、両者の結果を関連付けたい。

(inoue@oyama-ct.ac.jp)

付記 本研究は科学研究費基盤研究(C)「日本語コーパスと内省に基づく論述文語彙指導のためのWeb教材開発とその評価」(課題番号25381286)の助成を受けている。

注

注1 金澤2014を基に、○:△:×=2:1:0で算出。

注2 Guiraud値は「異なり語数を延べ語数で割った値」を補正した値で、比較的安定した値。他の指標に「延べ語数を異なり語数で割った値(n/k値)」もある。

注3 筑波大学留学生センター。

参考文献

1) 金澤裕之：日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス、ひつじ書房(2014)

中国における日本向け IT アウトソーシング企業の 中国人技術者に求められる日本語能力

— IT 専門日本語教科書開発のための基礎的調査より —

Japanese Ability Required for Chinese Engineers at IT Out-sourcing Companies in China:

A Basic Inquiry in Preparation for an IT Japanese Textbook

○王凱劍^{*1} 山本富美子^{*2}
OU, Kaishou YAMAMOTO, Fumiko

キーワード: IT アウトソーシング、システムエンジニア (SE)、プログラマー (PG)
Keywords: IT Out-sourcing, System Engineer, Programmer

1. はじめに (背景および目的)

中国ソフトウェア市場は2012年に25,000億元以上の売上額を達成し、巨大なソフトウェア産業に成長している(中華人民共和国情報産業部2013)。中国のITアウトソーシング企業のソフトウェア製品は、易観国際(2008)によれば、2008年の時点で半分以上が日本からの請負である。ソフトウェア開発はシステム設計書や仕様書を人間が理解して一つ一つプログラミングしていかなければならない。そのため、日本向けのソフトウェア開発に携わる外国人IT技術者には高度な専門日本語が必要とされる。

本研究ではこうした現状の下、日本向けITアウトソーシング企業の中国人技術者を対象に、どの程度、どのような日本語が必要とされるのか調査し、IT専門日本語教科書開発の基礎的資料とする。

2. 方法

日本向けITアウトソーシング企業(大連2社、瀋陽1社)の中国人IT技術者42名[システムエンジニア(SE)とプログラマー(PG)各21名]に対し、①日本語学習歴と勤務年数、②日本語能力と業務の関係、③使用した日本語教材と要望、④業務に必要な日本語についてアンケート調査を行った^{注1}。また、うち6名(SE3名、PG3名)に対して半構造化インタビューを行い、上記項目について詳細に調査した。

^{*1} 武蔵野大学大学院言語文化研究科修士課程

^{*2} 武蔵野大学大学院言語文化研究科教授

3. 結果および考察

3.1 SEとPGに求められる日本語能力とキャリア

調査の結果、中国人IT技術者に求められる日本語能力はキャリアと深く関係していることがわかった。

入社時の日本語能力は一般に高くてもN3レベルで、まずPGとして採用される。その後、毎年、業務内容の知識、IT技術力、日本語能力、コミュニケーション能力、管理能力を評価基準として上司の評価を受け、大半が3-5年でN1レベルに達してSEに昇進する。SEの給料はPGに比べて2倍というケースもある。そのため、彼らの91%は日本語が上手になるほど自分のキャリアに有利だと考え、社内の日本語研修の他、自ら日本語学習に励み、PGからSEに転身している。したがって、SEは平均学習期間が3.9年、勤務年数が5.5年で、PGの1.5年、1.4年に比べて非常に長い。日本語能力も、SEはN1が最も多く62%、N2レベルと合わせて86%を占める。PGはN3とN4が多く合わせて71%、N1はおらずN2が2名、N5も4名いる。

SE21名のうち今の日本語能力で仕事が十分にできると感じているのは、3年以上勤務しているN1の12名と、8年のN2の1名である。まあまあできると感じているのはN1の1名とN2の4名である。このN1の1名は、勤務期間が3.5年で、日本語能力、業務知識、IT技術も高いのだが、「内向的な性格でコミュニケーションが苦手」なために十分できないと感じている。N3、N4の3名は7年勤務していてもあまりできないと感じている。一方、PGで十分できると感じているのは勤務期間2

年のN2、2名のみで、9割は十分できないと感じている。

3.2 日本語教材に対する要望

大学、企業内研修で使用した日本語教材は、全員、一般向けの日本語教科書である。1/4弱（12人）が満足しているが、その反面で、「IT 専門用語」（81%）、「ビジネス・IT 業務に関する日本語」（78%）、「日本企業文化」（50%）、「マナー」（50%）を盛り込んだ IT 専門教材に対する要望が多く出された。

3.3 SE と PG の業務に必要な日本語

SE は主に 4 つの業務を行う。①日本人技術者から伝達された工程のコード規約^{注2}、ユーザー業務、概要設計書の内容を PG に教える。つまり、ブリッジ役を務める。②ユーザー業務に基づいて日本語で仕様書、単体・結合テスト^{注3}仕様書を書く。③リーダーと PG をサポートする。④不具合の解決、仕様追加と改善における情報を確認して伝える。

ユーザー業務は、行政・医療・商業・交通・金融等、ソフトウェア開発の依頼主の業界によって異なるため、日本人技術者の指示を理解するには、各業界の業務の流れとその流れに沿ったシステムの実現方法を把握している必要がある。日本人技術者との連絡は、Q&A 票、Email、ネット会議、国際電話、また時に直接会って行われる。以上から、SE は各開発ソフトウェアの業界用語、業務知識に加えて、4 技能総合の日本語能力が必要とされると言える。

一方、PG は主に 3 つの作業をする。①仕様書に沿ってコーディングする。②他の PG と互いに完成したソースコードをレビューする。③単体・結合テスト仕様書に基づいてテストする。これらの業務では仕様書を正しく「読む」技能と、ソフトウェア工程の

効率を向上させるために Q&A 票を「書く」技能が主として必要とされる。

3.4 IT 技術者向け日本語教科書の開発モデル

表1に、物流業界における在庫管理システムのソフトウェア開発を例に、IT日本語教科書開発モデルを示す。業界別の業務内容・流れと、その流れに沿ったシステムの実現方法が、まず日本人技術者により文章・口頭で説明される。それらをSEが理解してPGに伝えるため、業務内容とその流れに沿ったPG・SEの職種・段階別日本語教科書の開発が必要であると考えられる。PGはN3レベルで、業界別仕様書、Q&A表の読み・書き能力を主に養成する。SEは業界別ソフトウェア開発の業務、IT業務全般について日本人技術者とコミュニケーションできる4技能総合日本語の養成を目指す。

4. おわりに

IT 専門日本語教科書開発の基礎的資料を得るため、日本向け IT アウトソーシング企業の中国人技術者に対しアンケート及びインタビュー調査を行った。その結果、行政・医療・商業・交通・金融等の各業界の業務の流れに沿った業務知識と各業界・IT の専門用語・表現を PG から SE の職種・段階別に提示した日本語教科書開発が必要であると考えられた。

(g1372011@stu.musashino-u.ac.jp)

注1 60部配布し42部回収、回収率70%。

注2 プログラマーの間でコードの一貫性を保ち、コードを保守しやすくするための規約である。

注3 ソフトウェア開発で出来上がったものが仕様どおりに動くか、不具合や誤りがないか調べるテストで、単体テストは個々のモジュールのみを、結合テストは複数のモジュールを組み合わせで行う。

注4 言語文化研究科修士2年の劉威とともに考案した。

参考文献

- 1) 中華人民共和国情報産業部: 2012年電子情報産業統計公報, <http://www.miit.gov.cn/n11293472/n11293832/n11294132/n12858387/15173031.html> (2013)
- 2) 易観国際: 『2008年第2季度中国軟件离岸外包市場季度監測』(2008)

表1 IT 専門教材開発モデル^{注4}

業務の流れ	システム 実現方法	日本人技術者のSEへの 説明・表現例	専門用語の例		一般語 (録)
			物流	IT	
①出入荷 有無 確認	ユーザー ログイン 権限機能選択 合理性確認 Yes No 中止 合理性 再確認 Yes 出入荷機能 ロック	在庫システムに假ユーザー でログインして 権限機能を選択します。 権限機能を実行する前に まずデータベースから進 行中の出入荷業務があ るかどうかを確認します。 ある場合は中止して再び 確認します。ない場合は 出入荷機能をロックして 権限機能を行います。	在庫 出荷 入荷 出入荷	システム ユーザー ログイン 執行 データベース ロック	假(1) 機能(2) 選択(2) 進行(1) 業務(1) 確認(2) 中止(3) 再び(2) 場合(3) 行う(3)
②権限開始	権限開始	権限機能を開始してくだ さい。			開始(2)
③倉庫訪問 出入荷禁止					
④業務開始					

日本語で学ぶ簿記入門

— 中国人留学生に CLIL で簿記を教える試み —

Introduction to bookkeeping to learn in Japanese

岩瀬 ありさ^{*1}

IWASE, Arisa

キーワード：日本語、簿記、CLIL 理論

Keywords: Japanese Language, Bookkeeping, CLIL

1. はじめに（背景および目的）

筆者は、留学生にとって理解が難しいのは、専門用語そのものよりも、企業間の取引内容及びその背景知識、更に母国と異なる日本におけるビジネス習慣ではないかと考え、授業実践を試みた。

日本語教師として、日本語で簿記という専門科目を学ぶ留学生に、どのようなアプローチが可能だろうか。自らの学習経験を踏まえ、専門課程の教師とは異なる方法を意識的に捉え直したいと考えていた時に出逢ったのが CLIL 理論である。

CLIL（内容統合型学習）とは、教科を語学学習の方法によって学び、実践力を引き出す教育法である。4つのC（Cognition 認知、Culture または Community 文化、Content 内容、Communication コミュニケーション）と呼ばれる公理でその概念が示される。

簿記の授業の中心は、お金の流れを捉え、帳簿に記録するためのルールを学ぶことである。また、他の専門科目と大きく異なり、実習よりも座学が中心とならざるを得ない。そこで、認知の活性化を促すために、この CLIL 理論を参考に簿記入門の授業を行った。

2. 方法

対象となる留学生は大学の3年次に在籍する中国人留学生（男性1名／女性8名）で、日本語のレベルはN2からN1までの幅があった。2013年10月から2月にかけて、週1回の授業（90分×16回）で、簿記3級前半までを終了した。授業内容は次の通りである。

<内容>

1. 簿記とは何か その概要と目的
2. 損益計算書・貸借対照表
3. 簿記の5大要素
4. 仕訳・勘定口座記入
5. 試算表
6. 商品売買の記帳法
7. 現金・当座預金
8. 手形

大原学園では、通常、簿記3級教材としてオリジナルのテキストとドリルを用いている。しかし、今回はテキストから離れ、生教材をできるだけ授業に取り入れるようにした。CLILでは具体的な指導法の参考として6つの項目（多様な視点・安全で豊かな学習環境・本物らしさ・積極的な学習・足場づくり・協力）を挙げており、6つの項目はさらに30のチェックリストに細分化されている。これらを毎回の授業にできるだけバランスよく取り入れることで、通常の授業に比べ、留学生自らが考え、発話する機会を増やし、その反応を観察することにした。

この観察とともに、毎回、授業時には、ドリルを使用し、その正答率を学生の理解度を計る目安とした。また、期間中には、二度のまとめテスト（大原学園ALFA教材より改題）を実施し、学習範囲の到達度をみることにした。

3. 結果および考察

授業での留学生の反応や感想、また、テストを通して得られた結果は次の通りである。

*1 学校法人大原学園大原日本語学院専任教員

CLILの4つのCの中でCognition(認知)を特に意識して授業を進めたのが、まず導入部分となる「1. 簿記とは何か その概要と目的」と「2. 損益計算書・貸借対照表」である。通常授業ではあまり時間をかけるところではないが、敢えて時間を割いた。一例をあげると、筆者の知り合いの税理士の話を紹介し、簿記の魅力について留学生達と話し合った。また、計算書や貸借表が理解できるとどのようなメリットがあるのかという視点から、簿記の意義についてディスカッションを行った。これらの活動により、簿記そのものへの興味を留学生の反応から感じることができた。

この後「3. 簿記の5大要素」「4. 仕訳・勘定口座記入」「5. 試算表」へ進んだ。これらの章からは覚えるべき内容が増えるため、通常授業では、暗記とドリルの繰り返しが中心となっていく。最も大切な部分だけに、基本ルールを暗記することが教師から学生に促される場面でもある。しかし、CLIL理論のContent(内容)とCultureまたはCommunity(文化)との繋がりからみて、暗記を促すだけではなく、実体のある内容として留学生が勘定科目や数字を認識できるようにしたいと考えた。そのため、通常授業では、テキストの例を用いながら解説することが中心となるが、実例に徹し、留学生自身のこととして数字が捉えられるようにした。また、計算する上で欠かせない電卓に触れ、正確に速く計算するゲーム競争なども授業に取り入れた。毎年、実施されている全日本電卓競技大会の様子がDVDで紹介した際には、留学生は大変驚きを見せていた。それまで全く知る機会がなかった新しい世界に全員が興味を示し、数字に対する興味を維持する上で、刺激になった様子が観察された。

留学生にとって理解が困難であると実感できたのは、次章の「6. 商品売買の記帳法」であった。筆者自らも学習時に感じ、授業実践前に予想していた日本と中国の商品売買方式の相違点が鍵となることが授業の反応からも確認できたのである。商品売買の方法や仕組みは、未だ学生の立場である留学生には未知の世界であるため想像が難しい。さらに商習慣の違いが重なり、個人差はあるものの理解に時間が

かかった。このため、当初の計画であった90分×2コマを、留学生の様子を見ながら、90分×4コマに増やし、授業を進めた。この章では、Communication(コミュニケーション)を通じて、未知の事柄や商習慣の違いの意味が見出せるよう、学生間の気づきを促すことに配慮した。その結果、お互いに知識を補いながら、理解を深め合う姿が観察された。「7. 現金・当座預金」「8. 手形」も同様に、できるだけ金銭の流れを留学生が自然に体得できるよう、問いかけを増やし、皆で考えながら理解が深まるよう導いたところ、日本人学習者でも、なかなか理解しにくいと言われる「8. 手形」において、前述したまとめテスト結果を通して、一定レベルの理解に達したことがわかった。

今回の実践からは、簿記における専門用語や表現そのものに躓く学生は見られなかった。学習の妨げとして確認できた主な要因は、先に述べた通り、商取引の背景に関する知識不足であった。また、ドリルに出てくる日付、固有名詞(人名、企業名、地名等)の読み方に、学習のためのフォローが必要であることが新たにわかった。これらの考察を改善につなげていくことが今後の課題である。

4. おわりに

授業実践にあたり、筆者は簿記の内容に関する疑問点を事前に専門課程の教師に質問し、自らの理解に間違いがないことを確認することに最も配慮した。

今回の実践は、資格試験に合格することを一つの大きな目標とする通常授業とは異なる入門編であり、あくまでも試みとしての位置づけである。

ささやかではあるが、この授業実践を現場の専門課程の教師と共有し、今後も留学生対象の専門教育の課題について検討していきたいと考えている。

(arisa.iwase@mail.o-hara.ac.jp)

参考文献

- 1) 笹島茂編著：CLIL新しい発想の授業—理科や歴史を外国語で教える!?—(2011)
- 2) 渡部良典、池田真、和泉伸一共著：CLIL内容統合型学習—上智大学外国語教育の新たな挑戦—(2011)

EPA 介護福祉士候補者に対するシラバス作成

—「どこから、なにを、どのように」の視点から捉えた成果と課題—

Syllabus making for the EPA care worker candidate

—The result and issues from the viewpoint of "From where, at what, and how"—

○神村 初美^{*1} ○三橋 麻子^{*1}

KAMIMURA, Hatsumi MITSUHASHI, Asako

キーワード：EPA 介護福祉士候補者、シラバス作成、介護の専門日本語教育

Keywords: EPA care worker candidate, syllabus making, specialized Japanese education of the care

1. はじめに（背景および目的）

EPA 介護福祉士候補者（以下候補者）を対象とした施設着任後の教育支援（以下着任後教育）においては、介護福祉士国家試験（以下国家試験）受験までの3年間を考慮したシラバスが大きな鍵となるが、日本語教育の視点による具体的な言及は、三橋・丸山（2012）に見られる程度であり、実践研究の積み重ねが待たれる。そこで、2年間の着任後教育のシラバス作成プロセスについて、「どこから、なにを、どのように」という視点で省察し、その成果と課題を示したうえで、介護の専門日本語教育におけるシラバス案を提示する。

2. 方法

本実践は、2012年10月～2014年10月の2年間に行われた対面型集合研修（以下研修）^{※1}の、来日1年目を主な対象とした日本語コース（以下日コース）と、来日2年目を主な対象とした専門日本語コース（以下専コース）の2コースについて取り上げる。両コースとも、隔週1回5時間（午前2時間午後3時間）、年間全18回である。実践の省察には、①授業の振り返り記録（以下「振り返り」）、②候補者による授業評価（以下「授業評価」）、③各種到達度テスト結果（以下「テスト結果」）、④施設でのヒアリング記録（以下「ヒアリング」）を用いた。

3. シラバス作成のプロセス

両コースの「どこから」は、1年目開始時には、

先行実践事例及び介護の専門家（以下専門家）からの助言をたたき台とし構成した。2年目は、半年経過後の省察を反映させた。

3. 1 日コース「どこから、なにを、どのように」

1年目開始時の「なにを」「どのように」は、午前には介護の基本漢字語彙の習得をコロケーションの視点から促し、午後は日本語運用能力の向上を、介護現場での会話・聞き取り練習とそれらに付随した文法、オノマトペ等の表現の演習により図った。

半年経過後の「授業評価」により、特に実際の介護現場でのコミュニケーションの際にオノマトペが役に立ち、申し送り等の聞き取り練習が実践訓練となっていたことがわかった。一方「ヒアリング」により、施設側が、更なる日本語力の向上及び、介護の現場で即必要となる専門用語を理解語彙とすることが必須、と考えていることが分かった。そこで、上述の省察結果を、オノマトペ、聴解の更なる充実、専門用語解釈の短文読解に反映させることとした。

その結果、2年目の「なにを」は、①文法・オノマトペ、②会話・聴解、③短文専門読解を三つの柱とした。「どのように」は、具体的には①で、国家試験に頻出するあらたまった表現での機能語を扱い、②、③では、「ヒアリング」で寄せられた実働に直結する項目（②徘徊する利用者への声かけ、③「誤嚥性肺炎」に関する語彙解釈など）を取り入れた。また③では、同一の意味を示す用語であっても、介護現場で使用される日常語彙と、国家試験で使用される語彙との違いを示し、それらの語彙の相関性に注

^{*1} 首都大学東京健康福祉学部特任准教授 同左特任助教

目させ、理解のネットワーク構築を促した。

3. 2 専コース「どこから、なにを、どのように」

1年目開始時の「なにを」「どのように」は、午前
は介護の専門漢字語彙の習得をコロケーションの視
点より促し、午後は国家試験の事例問題をもとにし
た読解演習を中心とした。

半年経過後の「振り返り」「テスト結果」の俯瞰的
省察から、候補者側は、着任前研修の充実（野村
2013）によって、難解な介護の専門漢字であっても
習得できていること、語彙や文法の不明瞭さから文
脈を勘違いしていることが明らかになった。一方、
日本語教師側は介護の専門性に対し不安を抱いてい
ることが明らかになった。また、施設側の「ヒアリ
ング」から、学習支援として漢字は対応可能だが文
法は困難であること、合格に繋がる日本語教育支援
を希望していることが分かった。そこで、それらを
踏まえ改編することとした。

その結果、2年目の「なにを」は、年度前半で「国
家試験に対応できる文法力の養成から専門日本語読
解力の強化」を、年度後半で「総合問題の解答力に
繋げられる読解力の強化」を目標と定め、具体的
には、①候補者が苦手な国家試験のための文法、②候
補者が理解しにくい表現、③長い漢字専門語彙、④
介護の専門内容に関する読解（認知症、糖尿病、介
護保険、難病）とした。また、「どのように」は、④
で専門家とのチームティーチング（以下TT）を取
り入れ、研修日の午前、日本語教師が午後の授業に
備え専門読解の授業を行い、午後、専門家が主軸と
なって専門の解説を加え、その後、過去問題演習を
行うとした。特に、④の午前授業への省察から、介
護の文脈での言語教育に専門性を絡め、どのように
理解に繋げるのかという課題が示されていたため、
その改善策として、音読を活用しながら専門語彙や
表現の獲得を、4技能統合タスクから読解力の向上
を、それぞれ図ることとし、積極的に既有知識の活
用、及びピア学習^{注2}を促した。このような取り組み
を「立体的な専門読解の授業」と呼んでいる。

4. 成果と課題

日コースの成果としては、「授業評価」から、「オ
ノマトペ」、「会話・聴解」が効果的と示され、候
補者は介護現場及び日常生活でのコミュニケーション
能力の向上を求めていることが分かった。課題と
しては、多様な場面設定の必要性があげられた。一
方、専コースでは「授業評価」から、介護の専門内
容に関する読解の、特に介護保険が難解であると示
された。また、TT関連の学習活動が効果的であった
とされ、「立体的な専門読解の授業」の有効性が示
された。課題としては、専門家がより詳細に説明し
ようとする際に突出する難解な表現・語彙をどのよ
うに橋渡しするのか、があげられた。これに対しコ
ース2年目の「振り返り」からは、日本語教師と専
門家が異領域の専門性に寄り添うことが有効であろ
う、と考えられた。しかし、検証の余地がある。

5. おわりに

介護の専門日本語教育は緒に就いたばかりであり、
先行事例も少ない。一方、施設配属後の教育は、い
まだ教育担当者の個人的な努力に委ねられており、
その負担は計り知れない。今後一層、実践研究を積
み重ねることによって専門的知見を提示し、支援に
繋げていく必要があると考える。

(kamimura-hatsumi@tmu.ac.jp)

注

注1 東京都と首都大学東京による官学連携事業「アジア
と日本の将来を担う看護・介護人材の育成」詳細以下

<http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2012/03/20m3s100.htm>、参加者数は各コース1回8名～23名

注2 学習者同士だけで行う課題解決のための遂行活動。

参考文献

- 1) 三橋麻子・丸山真貴子：EPA 介護福祉士候補者への学
習支援と支援体制—今後の連携・ネットワーク作りを目
指して—、2012年度日本語教育学会春季大会予稿集、
pp.217-222（2012）
- 2) 野村愛：介護福祉士候補者に対する日本語教育の制度
的課題、2013年度日本語教育学会春季大会予稿集、
pp.239-244（2013）

日本語による専門技術習得の成功・不成功例の分析

—ベトナム人中堅技術者への原子力技術移転を例に—

Investigation of Successful/Unsuccessful Cases When Learning Technology in Japanese :
In the Case of Nuclear Technology Transfer to Vietnamese Mature Age Engineers

○外崎 淑子^{※1} 元田 静^{※2}

TONOSAKI, Sumiko MOTODA, Shizuka

キーワード：技術移転、日本語習得、年齢、聴解力、語彙力

Keywords: technology transfer, Japanese learning, age, listening, vocabulary

1. はじめに

東海大学では 2012 年度より「ベトナム原子力プロジェクト人材育成計画」を開始し、ベトナム電力グループ社員を受け入れ、日本語で原子力工学・原子力発電専門技術の教育を行っている。2012 年 9 月に 1 期生 15 名が来日、2014 年 9 月に帰国した。現在、1 期生はベトナムにて、日本企業との原子炉建設に向けて準備中である。

外崎・元田 (2014)、外崎・元田 (印刷中) では、1 期生の日本での学習進捗状況を観察し、専門 (原子力工学) の習得を促進する要因、阻害する要因を考察した。その結果、日本語の成績と専門の成績との間には強い正の相関があること、日本語聴解の成績と年齢との間には負の相関があることが判明した。ただし、年齢と専門の成績との間には有意な相関がなかった。これは、年齢が高くとも専門の習得に成功した者がいたためである。そこで、本発表では、年齢の高い研修者の専門の成績と日本語の成績の得点傾向を分析するとともに、年齢が高く、日本語にも専門にも習得に困難を極めた 2 名の誤用傾向を精査することを通して、年齢が高い技術者への日本語教育のあり方に一つの提案をしたいと考える。

2. 研究方法

年齢と日本語力との間に負の相関があることを確認するために、1 期生全員に、筑波大学留学生教育センターが開発した TTBJ (SPOT90、文法 90、音

声文法 30、音声語彙 30)¹を受けさせ、スコアと年齢の相関を見た。また、先行研究において、年齢の高い研修者でも専門で好成績を修める者があったことから、年齢の高い 6 名に絞って、学期末の日本語の成績と専門の成績のデータを考察した。さらに、6 名のうち、日本語も専門も習得困難であった 2 名に焦点を当て、語彙テストと会話録音データから、誤用傾向の分析を試みた。

3. 結果と考察

3. 1 年齢と日本語力との相関

2014 年 4 月に 1 期生 15 名全員に TTBJ を受けさせた。その結果、SPOT90、文法 90、音声文法 30 の 3 つは年齢との間に負の相関が見られた (それぞれ、 $r=-.64 p<.01$ 、 $r=-.71 p<.01$ 、 $r=-.64 p<.05$)。音声語彙 30 との間には有意な相関は見られなかったが、1 名を除くとやはり年齢の高い者にスコアが低い傾向が見られた。

3. 2 日本語の成績と専門の成績との関係

つぎに、年齢の高い 6 名に絞り、2013 年度春学期の別科日本語研修課程での成績 (聴解、読解、漢字語彙) と専門の成績の得点傾向を見た (表 1)。専門の成績には、2012 年度秋学期の原子力初歩「語彙」の成績、2013 年度秋学期の「放射線」基礎科学の期末試験の成績、2013 年度の原子力工学 6 科目に専門実務を加えたスコアを 100 点換算したものを「全体」に示した。

研修者 A は、日本語、専門全ての成績がよかった。研修者 B、C、D は、日本語聴解、読解の点数がクラ

^{※1} 東海大学国際教育センター准教授

^{※2} 東海大学国際教育センター准教授

表1 年齢の高い研修者の成績

研修者	A	B	C	D	E	F	平均	
所属クラス	5	6		7				
年齢	33	34	38	34	33	35	31.6	
日本語成績	聴解	89	49	53	65	39	25	
	読解	83	56	56	58	48	56	
	漢字語彙	97	96	94	95	58	28	
専門成績	語彙	100	96	78	89	38	42	80.3
	放射線	83	78	68	87	54	31	72.3
	全体	90	88	86	89	77	72	84.3

平均よりも低いものの、漢字語彙の成績はクラスの平均点を大幅に上回る90点台であった。また、B、C、Dは専門の成績も比較的良い。一方、研修者E、Fは、聴解、読解、漢字語彙の全てが低く、専門の成績も他の研修者と比べると低い。日本語の成績は所属クラス毎に異なる試験であるためそのままでは比較できないが、専門の試験は全員共通である。専門の成績不振者は、専門語彙の試験でも得点が低い。研修者B、C、DとE、Fとを比較すると、語彙の成績の違いが専門の成績の違いと関係している可能性がある。

3. 3 専門・日本語とも成績不振の研修者の傾向

研修者E、Fは、基本的な語彙の未定着が目立った。語彙テストにおいて、研修者Eが3回連続で間違え、正答に行き着かなかった語を抜粋し、表2に挙げる。研修者Eの間違いの傾向としては、語を取り違えて覚えている例が多いことである。そのため、自由な会話の中で、意志の疎通がしづらいことが頻発した。

研修者Fの場合、「だいかく(大学)」「しそがしい(忙しい)」のように音声近似の間違いが多か

表2 研修者Eの語彙の間違い()内は正答

音声近似誤答	えんぴつ(鉛筆)、きょうかつ(教室)、サッス(シャツ)、ゆめな(有名な)、りんこう(リンゴ)、れいぞう(冷蔵庫)、あぶろ(お風呂)
取り違え誤答	きつぷ(切手)、とどける(捨てる)、えらぶ(調べる)、つけていく(連れて行く)、やむ(取る)、ちから(はっきり)、つごうが悪い(気持ちが悪い)、よい(汚い)、なく(測る)、おれる(倒れる)、切る(つける)、ぼねんかい(運動会)

った。疑問語の間違いも見られ、会話データからも疑問語が入った時の教師の発話が理解できずに会話が成立しない例が散見された。2例挙げる。

(1)教師：どこへ行きますか。

F：遊びに行きます。

(2)〈ベトナム人は魚をよく食べるという話の後〉

教師：魚をどうやって食べますか。

F：おいしい。

研修者E、Fともに、語彙力の低さがコミュニケーションの失敗に繋がり、語彙の習得戦略がないことから、専門の習得がうまくいかなかった可能性が考えられる。

4. おわりに

専門性の高い技術の移転を行う場合、研修者の年齢がある程度高くなることは致し方ない。年齢が高いと日本語のスコアは低くなる傾向が見られるが、一方で年齢と専門の成績との相関はない。そして、年齢が高い研修者で専門の習得に成功している者は、語彙の習得にも成功していた。今回の分析により、専門語彙と基本的な生活語彙の習得が達成されることで、専門工学の知識の習得に成功し、かつ現場でのコミュニケーションが必要となる実験や実務を日本語力が低くなりにも乗り切れる可能性が示された。今後は語彙習得の成功者の戦略を分析し、語彙習得の手助けをすることで日本語による技術移転を成功させたい。

(tonosaki@tokai-u.jp)

注

注1 詳細は[<http://ttbj.jp.org/>]を参照のこと。

参考文献

- 1) 外崎淑子・元田静：ベトナム原子力技術者育成における日本語教育カリキュラムの構築に向けて-原子力工学の習得に必要な日本語力と情意面からの考察-、東海大学紀要国際教育センター、Vol.4, pp.2-20 (2014)
- 2) 外崎淑子・元田静：ベトナム原子力技術者育成における日本語教育カリキュラムの構築に向けて(その2)-日本語力と情意面からの考察を元とした2期生受け入れに向けての改善案-、同上紀要、Vol.5 (印刷中)

医療専攻留学生の専門領域学習観に関する PAC 分析を用いた事例研究

A case study about learning beliefs of international students for medical science using PAC analysis

○石鍋 浩^{※1} 松田 勇一^{※2} 安 龍洙^{※3}
OISHINABE, Hiroshi^{※1} MATSUDA, Yuichi^{※2} AN, Youngsu^{※3}

キーワード：医療専攻留学生，PAC 分析，臨床実習

Keywords: Medical international students, PAC analysis, Clinical training

1. 背景と目的

近年、医療専攻留学生をめぐる研究が増加している（中川 2010, 日本語教育学会 2010, 奥田 2011, 宇佐美 2012）。しかし、その大半は言語学的研究であり、医療専攻留学生の意識にアプローチした研究は少ない。本研究では、個人イメージ構造分析手法である PAC (Personal Attitude Construct) 分析（内藤 1997）を用い、医療専攻留学生の専門領域学習観を質的に検討し、学習者のより良い理解とより効果的な学習支援策に資することを目的とした。

2. 方法

日本国内の大学学部の医療専攻留学生 4 名を対象とした（1 年生 2 名：対象 A と B, 4 年生 2 名：対象 C と D）。実験に際し、倫理面について文書と口頭で説明し協力の同意を得た。内藤（1997）に従い被験者ごと PAC 分析を実施した。実施時期は対象 A と B（1 年生）が 1 学期間の学習終了時、対象 C と D（4 年生）が 7 学期間の学習終了時点であった。

PAC 分析の結果得られたデンドログラムをもとに、次の 2 点について検討した。(1) 医療専攻留学生の学習観の特徴は何か。(2) 1 年生と 4 年生の学習観を比較した際どのような特徴がみられるか。

3. 結果

図 1 から図 4 は、対象 A から D に対するクラス

※1 国際医療福祉大学国際交流センター助教

※2 宇都宮共和大学シティライフ学部准教授

※3 茨城大学留学生センター教授

ター分析の結果得られたデンドログラムである。縦軸は連想項目の重要順位である。各連想項目の内容（評価）がデンドログラム内に示されている。

対象 A は 10 個の連想項目を 4 つのクラスターに分類した。それぞれ「勉強に対する気持ちの持ち方（図 1 縦軸 1, 2, 3）」、「健康面の重要性（5, 7）」、「日本語面の難しさ（9, 10）」、「就職につながるもの（4, 6, 8）」と解釈された。対象 B は 12 個の連想項目を 5 つのクラスターに分類した。それぞれ「入学前のイメージ（図 2 縦軸 1, 4, 3, 2）」、「自分の将来（5, 6）」、「入学後のイメージ（1, 2）」、「自分の国の事情（8, 9, 10）」、「想像より大変（7, 11）」と解釈された。対象

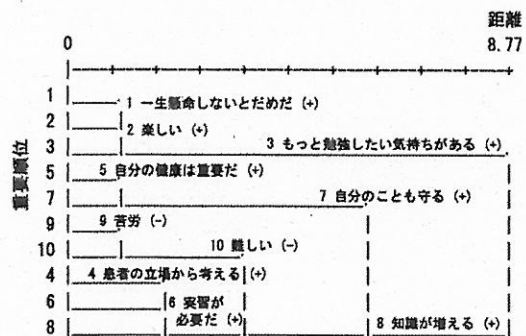


図 1 対象 A のデンドログラム

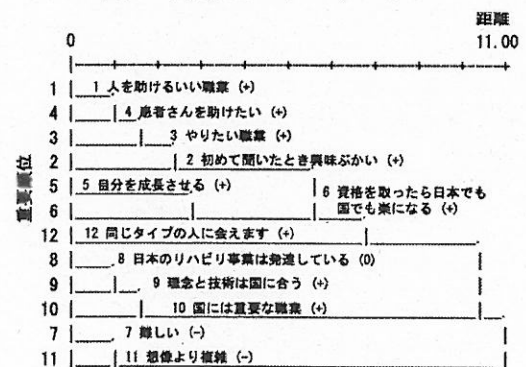


図 2 対象 B のデンドログラム

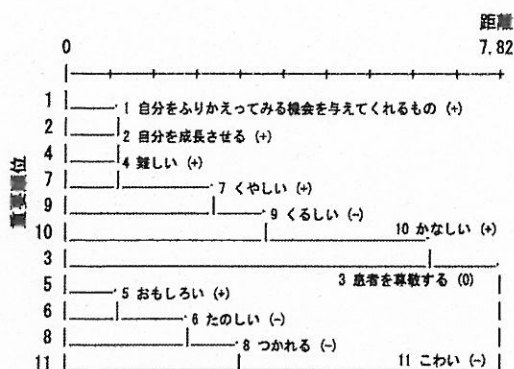


図3 対象Cのデンドロラム

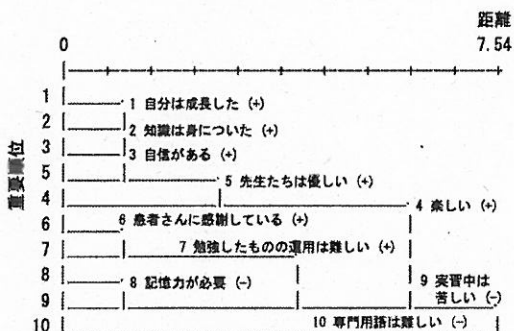


図4 対象Dのデンドロラム

Cは11の連想項目を3のクラスターに分類した。それぞれ「成長の機会(図3縦軸1,2,4,7,9,10)」,「実習の経験(3)」,「勉強に対する緊張感(5,6,8,11)」と解釈された。対象Dは10個の連想項目を3つのクラスターに分類した。それぞれ「正しい選択(図4縦軸1,2,3,5,4)」,「実習のイメージ(6,7,8,9)」,「専門科目の難解さ(10)」と解釈された。

4. 考察

4-1. 専門領域学習観の特徴

対象4名全てにおいて学習における「困難さ」に関するクラスターが形成された。これまでの研究は、学習の「困難さ」について研究者側からの指摘が中心であった(日本語教育学会 2010)。本研究では、学習者自身の意識の実態にアプローチした結果、医療専攻留学生自身も学年に関わらず専門科目の学習に対し困難を感じていることがわかった。国家試験問題を対象としたこれまでの検討(中川 2010, 奥田 2011)は卒業時を目指した支援として有効であるが、今後は入学直後の学習支援を目指した研究も必要であると考えられる。

就職につながるもの(対象A),自分の将来(対象B)のように卒業後の進路を1学期終了時にすでに

具体的に意識している点は、他の専攻とは異なる医療専攻留学の特徴のひとつであると考えられる。

4-2. 1年生と4年生の比較

4年生2名において、独立したクラスターとして「実習」が形成されたのに対して、1年生では「実習」のクラスター形成は見られなかった。臨床実習の経験の有無が要因となっていると考えられる。

対象Aにおいて、クラスターは形成されなかったが、「実習が必要だ(6)」という連想項目がみられた。対象Aは出身地で医療領域の教育を受けた後、来日した。そのため、自らの専門領域における展望を有していたものと考えられる。質的な検討を通し、より詳細な学習者の理解が可能となると考えられる。

5. まとめ

医療専攻留学生のような、従来検討困難であった少数学習者の専門領域学習観の一部が明らかになった。学習者の理解と学習支援策の検討に有効な資料となりうると考えられる。

(steintopf@iuhw.ac.jp)

参考文献

- 1) 宇佐美洋:「社会」分野—研究観の再考と拡張を促すための原動力として—,日本語教育,153,55-70(2012)
- 2) 奥田尚甲:看護師国家試験の語彙の様相—日本語能力試験出題基準語彙表との比較から—,国際協力研究誌,17(2),247-248(2011)
- 3) 内藤哲雄: PAC 分析の適用範囲と実施法,人文科学論集,31,51-88(1997)
- 4) 中川健司:基礎医学述語を学ぶ上で優先的に学習すべき漢字の選定の試み—二漢字語及び基礎医学術語中の出現漢字傾向調査を基に—,日本語教育,145,61-71(2010)
- 5) 日本語教育学会「看護と介護の日本語教育」ワーキンググループ:介護福祉士国家試験問題の日本語の難しさについて考えるための基礎資料(改訂版)—第21回・第22回試験の全問分析結果のまとめ—(2010)
<http://www.nkg.or.jp/kangokaigo/images/kisoshiryov2.pdf>,2015.01.12 閲覧

謝辞:本研究は文部科学省科学研究費(課題番号:24520566)の助成を受けた。

外国人学習者の古語・文語学習における困難点

— 研究の過程で古語・文語文献を扱う留学生・研究者へのインタビュー調査から —

Difficulties in learning classical Japanese for non-native speakers of Japanese:

Based on the interviews of international students and researchers

○山口 真紀^{*1} 武井 直紀^{*2}

YAMAGUCHI, Maki TAKEI, Naoki

キーワード：古典日本語、古語・文語学習

Keywords: Classical Japanese, Learning classical Japanese

1. はじめに（背景および目的）

国際交流基金の調査（2012）によると、日本語学習の動機として「文学・歴史に興味があるから」は16項目中第4位（61%）である。研究の過程で古語・文語文献を使用する留学生・研究者に対する古語・文語専門日本語教育の必要性は、鈴木(1995)等においても長らく指摘されてはいたが、この分野での先行研究は未だ少なく、その多くを授業報告が占める。教材も国内で開発されたものは松岡（2001）、足立（2003）の他は管見の限りなく、国内における教材開発も十分とは言えない。近年では、深沢(2013)の古典文法教授についての論考があるが、教育・教材開発のための基礎研究・基礎資料の蓄積はこれから充実させていくべき段階にある。第2言語教育（日本語教育）の視点に立った古語・文語教育研究を進めていくにあたり、学習者がどのように学び、どのようなサポートを必要としているのかについての実態調査研究から始める必要があると考えられる。

以上の背景から、当該分野における専門日本語教育を考える第一段階として、「留学生が古語・文語を学ぶ際の困難点は何か」を把握したいと考え、インタビュー調査を実施した。

2. 方法

研究の過程で古語・文語文献を扱う留学生・研究者（10名。日本で研究活動を行っている者。表1参

照）を対象に、日本語による半構造化インタビューを行った。質問内容は以下のとおりである。

- 1) 古語・文語学習の感想
 - 2) どのような点が難しかったか。それをどうやって克服したか。
 - 3) どのような教材・ツールを使用したか。
 - 4) 古語・文語学習について今まで受けてきた教育は十分といえるか。
 - 5) 自らの経験を振り返って、留学生のためにどのようなケア（教材・環境）があったらいいと思うか。
- 一人目のインタビューで、「現代日本語と古語の違い」についての指摘があったため、以降下記の項目を追加した。
- 6) 現代語の学習と古語の学習で、その違いに困ったことがあるか。

文字化データに対して佐藤(2008)の手法で定性的コーディングを行い、困難点と背景、必要とされる支援の関係を図式化（紙幅の都合上図は省略）した。

3. 結果および考察

古語・文語学習を通して、専門分野に対する興味とは別に、全ての人が「時間がかかる」、「大変だ」という感想を持っていた。この背景を探るべく、「どのような点が難しかったか」について尋ねた結果、知識面では3つの困難点が上がった。

- ① 文化的・歴史的背景知識（イメージができない）
- ② 文法（現代語文法との違い）
- ③ 語彙（現代語との違い）

^{*1} 東京工業大学社会理工学研究科博士後期課程、

同大学留学生センター、東京大学工学系研究科非常勤講師

^{*2} 東京工業大学留学生センター教授

表1 インタビュー協力者の概要と学習方法 (実施期間 2014年6月～2015年1月:国内)

協力者	性別	国籍	専門	所属	古語入門期の学習の方法(教材)
Aさん	男性	オランダ	室町時代の宗教	大学院生(オランダ)	大学院授業(担当者作成教材)
Bさん	女性	韓国	絵巻物・御伽草子	学部生(国内)	独学
Cさん	男性	イスラエル	中世仏教	大学院生(アメリカ)	大学院授業 (<i>Classical Japanese</i> : <i>A Grammar</i>)
Dさん	女性	カナダ	現代日本文学	大学院生(アメリカ)	
Eさん	男性	アメリカ	近代日本海運業	大学院生(アメリカ)	
Fさん	男性	アメリカ	落語	元研究員(国内)	
Gさん	女性	ロシア	明治の女流文学	大学院生(ロシア)	大学院授業(担当者作成教材)
Hさん	女性	韓国	仮名草子	大学院生(国内)	大学院授業(担当者作成教材)
Iさん	女性	中国	江戸の橋建築	大学院生(国内)	独学
Jさん	女性	韓国	仏教と女性	大学院生(国内)	独学

上記3点をどうやって克服したかについては、

- ・あらゆる手段を用いて調べ、知識を積み上げる。
- ・先生に相談する。

という2点が上がった。今回調査した欧米の大学院所属の学生からは、最初の古典の授業で教師に「古語は現代日本語とは全く別の外国語である」ため、「現代日本語の知識は一度すべて捨てるように」とアドバイスされるとの話があった。今回協力者の好意で文法教材を数点閲覧したが、現代日本語教育文法や現代語語彙とのつながりを意識した記述は見つけられなかった。しかし、学習者は「現代日本語の知識に頼るほかはない」ため、結局「現代語とのつながりを自分で探す」作業が学習の過程で生まれる。

また、知識面以外の困難点として「いい辞書がない」、「気軽に質問できる人がいない」等教材や学習環境の未整備についての指摘があった。国内では、入学して初めて古語資料の読解を迫られたものの、専門家による特別な手当てや教材がなく、インターネットなどを使い独学を続けるといった孤独な学習環境を示す事例が複数あった。

今まで受けた教育については全ての人「十分ではない」とし、必要な支援として以下のものが示唆・提案された。(⇒に対応する困難点を示す。)

- 1) 文化・歴史の視覚的理解を助ける資料集⇒①
- 2) 留学生向け日本歴史の概説書・授業⇒①
- 3) わかりやすい日本語で記述された辞書⇒③
- 4) 疑問点を気軽に質問・相談できる人・環境(特

に国内大学所属)⇒①、②、③

- 5) 現代語とのつながりを意識した記述⇒②、③
- 6) 専門に即した内容の教材(候文・漢文など)

4. おわりに

限られた事例からではあるが、留学生特有の困難点を意識した古語・文語教育、教材開発の必要性が示唆された。今後さらに調査を進めていきたい。

(makiyama814@yahoo.co.jp)

付記

本研究は2014年度田島毓堂語彙研究基金の助成を受けた。

参考文献

- 1) 国際交流基金, 海外の日本語教育機関の現状 2012年度日本語教育機関調査より, くろしお出版, (2013)
- 2) 鈴木泰, 古典語と日本語教育, 国文学解釈と鑑賞, 60, pp.139-144, 至文堂, (1995)
- 3) 松岡弘, 一橋大学学術日本語シリーズ 7 学術日本語の基礎(二) 近代文語文を読む, 一橋大学留学生センター, (2001)
- 4) 足立幸子, 古文入門, 大阪外国語大学留学生日本語教育センター, (2003)
- 5) 深沢愛, 外国人留学生の文語文法・古語学習について考える(1)ー文語助動詞の場合ー, 近畿大学文芸学部論叢, 25, pp.128-114, (2013)
- 6) 佐藤郁哉, 質的データ分析法, 新曜社, (2008)
- 7) Haruo Shirane : *Classical Japanese: A Grammar*, New York: Columbia University Press, (2005)

専門基礎日本語を学ぶ学習者の「構造化能力」の構築

— 研究留学生による専門紹介プレゼンテーション活動の観察を通して —

Research Students' Process of Constructing Their Academic Presentation Skills:

By Observing their Japanese Lower Intermediate Class

福良 直子

FUKURA, Naoko

キーワード：専門基礎日本語、研究留学生、アカデミックプレゼンテーション

Keywords: Basic Academic Japanese, Research students, Academic Presentation

1. はじめに

従来の専門日本語教育研究では、日本語が中・上級レベルの学習者が主な対象であった。これに対し春原(2006)は、日本語能力試験3級程度でIT関連の仕様書を翻訳している人達や技能試験を受けるエンジニアの存在を挙げ、高度な日本語能力の有無に関わらない専門日本語教育の可能性を示唆している。本発表では初級段階からの専門日本語教育の可能性を探るべく、研究留学生による専門紹介プレゼンテーション(以下適宜プレゼン)活動を取り上げる。

第二言語学習としてのアカデミックプレゼンテーション活動には、主に言語、構造化能力、トピックに関する知識の3点の運用が複合的に作用すると考えられるため、各側面から指導を行う必要がある。本発表では「自身の文章を構成や論理展開に留意して作成する能力」(村岡2012)を「構造化能力」と呼び、上記3点の中でも特に指導が必要であると考えられる「構造化能力」の運用に着目する。具体的には、発表原稿とスライド等のプレゼン資料が学習者と教師の相互行為を通し、改善していく過程を学習者の意識や背景要因も併せて考察する。

研究課題は、(1)どのような過程を経てプレゼンの質が変化するのか、(2)上記(1)の過程に「構造化能力」はどうか関係しているか、以上の2点である。これまで第二言語習得の分野で扱われてきた学習過程の研究は、主に特定の文法事項や表現等の習得を対象としたものであった。本発表ではよりマクロな観点からアカデミックプレゼンテーション資料の作成

過程に着目し、構造化プロセスの一端を明らかにしようと試みるものである。

2. 方法

調査方法は、関西地区のある大学における大学院進学(博士前期および後期課程)を目的とした日本語予備教育初級後半クラスにおいて、事前アンケートにより9名に調査協力を得た。調査協力者の専門分野は、工学系5名、生物学系2名、化学系1名、医学系1名である。このクラスでは主に、特定の総合的な日本語教材を用いた授業が週5日、プレゼンに特化した授業が週1日行われている。授業は筆者を含む5名の教師が担当している。調査期間は2013年10月～2014年2月、2014年4月～8月の2学期間で、15週間のコース終了時に実施される「専門紹介プレゼン」の準備授業における、各調査協力者と3名の教師との会話をICレコーダーで録音した。また、発表原稿とスライドの複数回の提出、背景情報を尋ねるアンケートに加え、約30分間のフォローアップインタビューを3回程度実施した。分析対象は、提出されたプレゼン資料(発表原稿とスライド)および会話とインタビューの文字化資料である。

3. 結果および考察

分析結果として、初級後半段階においても学習者と教師との対話等を通して、構造化が促進され得ることが明らかになった。「構造化能力」に関しては、特に「情報の配列についての意識」(村岡2014)の重要性が示唆された。すなわち、情報の関連性や量的バランスへの意識が構造化を促進させる。茂住

(2007) はプレゼンの授業で指導が必要なアカデミックスキルとして論理的な思考力、構成力、聞き手への配慮等を挙げ互いの関連を指摘しているが、本発表の構造化プロセスにおいても「聞き手への配慮」との関連が観察された。以下に具体例を示す。

(1) 情報の関連性

X 電池の使用例である昆虫ロボットの説明で、推敲前は以下のように構成物の羅列のみであった。

「例えば、昆虫ロボットのような場合には、X電池、(構成物名) A、B、C、駆動センサで構成され、使用されています。」

しかし、以下の19Tにある下線部のように「聞き手への配慮」が促されたことが契機となり、学習者が個々の構成物を列挙した意図、すなわち情報の関連性について説明が加えられた。

3T ジャあ、もしこの説明がむずかしいというなら、(中略) X電池と関係があるところだけ[注1]?

6S 全部が関係がある。

19T ジャあどこを説明しましょうか。たぶんこのセンテンスを聞くと、聞いている人はえーと、これとこれとこれはどんな関係ですか、これは何ですか、たぶん質問があるかもしれません。もし説明しないなら…どうしたらいいかな…?

20S このスライドで私が話したいものは、この昆虫ロボットの中にいろいろな構成物があります。この中にX電池が使っています。まあこの昆虫の作る方法はX電池だけじゃないですか。この部分、この部分の専門が…。後でこのロボットができます。それぞれいろいろなものも、この部分が使えます。

25T なるほど、なるほど。わかりました。いろいろなもので、X電池だけではなくて、こういうものも、全部のテクノロジーでできています、ってことが言いたい?

上記25Tの波線部で教師は学習者の表現を用いつつ内容を再構成している。学習者はこのコメントを反映し、推敲後の発表原稿には「このようにX電池だけでなく、様々な分野の技術が集まって、一つの完成体を作るのが一般的です。」という一文を最後に加えた。この加筆によって関連性がより明確になり、構造化が促進されたと考えられる。

(2) 情報の量的バランス

情報の量的バランスが考慮され、構造化が促進された例を示す。推敲前は5文で書かれた定義が推敲後は1文になり、インタビューでは次のような考え

や解釈が提示された。

「私の考えは例えばこのセンテンスなくてもいい。話すはたぶんゆっくりです。(※話すのに時間がかかるという意) この種の電子製品の基礎はY回路です、It's enough definition. 考えはスクリプトは簡単になる、いいです。Script fit the slide better. 話す人はeasy to speak.そしてオーディエンスは聞くやすい。」

実線部より、この学習者は「情報の配列についての意識」を一定程度有していることがうかがわれ、発表時間の制限と自身の日本語力のモニターから、情報量を考慮していることがわかる。その結果、定義に必要な情報が焦点化されスライドとの整合性が高まり、構造化が促進されたと推測される。上記の波線部では、構造化されたプレゼンは「聞き手」にとってもわかりやすいとの学習者の考えが示された。

4. おわりに

以上、限定的なデータであるがプレゼンの構造化プロセスの一端を示した。情報の関連性と量的バランスへの意識化を促進できれば、初級段階からのアカデミックプレゼンテーションも十分に可能である。情報の関連性と量的バランスとの関係や「構造化能力」に関する他の要因等、詳細の検討は今後の課題とする。 (fukura@khaki.plala.or.jp)

注

注1 紙幅の関係上会話データは部分的に記載した。

Tは教師、Sは学習者を示す。

参考文献

- 1) 春原憲一郎：専門日本語教育の可能性—多文化社会における専門日本語の役割—，専門日本語教育研究，第8号，pp.13-18 (2006)
- 2) 村岡貴子：研究留学生のための専門日本語ライティング教育の可能性，仁科喜久子（監）：日本語学習支援の構築—言語教育・コーパス・システム開発—，凡人社，pp.77-90 (2012)
- 3) 村岡貴子：専門日本語ライティング教育 論文スキーマ形成に着目して，大阪大学出版会 (2014)
- 4) 茂住和世：情報提供型口頭発表の内容構成とレジュメ化に見られる問題点—アカデミックスキルの観点から—，日本語教育方法研究会誌，14-1，pp.30-31 (2007)

第17回 専門日本語教育学会研究討論会誌

2015年3月7日発行

© 専門日本語教育学会 2014

北九州市立大学基盤教育センターひびきの分室

池田研究室気付

〒808-0135 北九州市若松区ひびきの1-1

TEL:093-695-3228 Fax:093-695-3328

発行：第17回専門日本語教育学会研究討論会実行委員会

山本富美子(委員長)、二通信子、大島弥生、

山路奈保子、島田徳子

印刷：多摩ディグ

〒184-0012 小金井市中町2-19-31

TEL:042-384-2491